

えんぼとたんぼの始発駅 里山ビオトープ二俣瀬	会 報 第 101 号	2009年12月23日 里山ビオトープ二俣瀬をつくる会 編集責任者：西原 一誠
---------------------------	---	---

1. 活動報告（事務局 記）

— 12月4日（金）餅つき準備

もち米水洗150kg、 テント・モミ台組み立て、灯油購入等

石臼・だいがら運搬、材料購入（餡、餅とり粉、テープ、手袋）

16名もの参加で早めに準備完了しました。

— 12月5日（土）収穫祭が盛大に行われました。稲苗を頂いてご指導を頂きました、JA山口宇部から前田組合長がおいでになりダイガラでつき始めをして頂きました。ビオトープで栽培したミヤタマ餅米2俵半約50臼をダイガラで経験し、また機械でも搗いていただきました。

参加者は二俣瀬小から大村校長や先生や親御さん3名、児童7名、里山自然観察隊隊員18名、保護者会員11名、幼児3名、会員26名地域応援者6名の総計76名でした。

終了後、田村副会長にて会報100回記念冊子の編集進行状況を説明されました。

— 12月12日（土）会報100回記念冊子の編集会議をしました。

6名の参加でした。

— 12月19日（土）収穫祭 PART-2 として、寒風吹き荒れる大雪の中、蓮根堀を行いました、本年は成育も良く、たくさんの大きな蓮根でした。オオフサモの除去や掘った後に堆肥運搬も行い本年度の仕事納めとしました。（19名の参加）

又、冬ごもりをしていた大きなウシガエルが2匹見つかりました。

永山酒造で頂いた甘酒で乾杯をし、本年をしめくくりました。

その他 休日にタテバチドメグサの間引を前田歳朗エコアップリーダーが活動されています。

2. 今後の予定（事務局 記）

◎ 見学者

予定はありません

◎ 行事

— 1月3日（日）正月なので活動中止

— 1月16日（土）初集会なので話し合い後に維持活動（特に修復工事）

3. 来訪者の声（東屋のノートより一部抜粋）

今月は書き込みがありませんでした。

4. 会員の声

「収穫祭派 part-2 (レンコン収穫)に参加して」 (内藤 武顕 記)

ビオトープのレンコンはうまい。今夜が三日目。酒もうまい。

19日朝、林 弘会員宅にレンコン堀ユニホームを借りに伺いました。丁寧に採り方等の説明を受け、ユニホームを抱いて現場に向かいました。たき火は始まっており、東屋の北側はビニールシートにて囲まれ、すでに防寒対策は施されていました。

09年ビオトープのラストミーティングは焚き火の傍で行われました。ビオトープの冬の朝は風情がありました。ミーティング後、それぞれ仕事に散りました。

私は何も考えず蓮池に行き、足をみずの中に入れました。左足はすっぽり泥にはまる。ためらうこともなく右足も滑り込ませました。さて次の左足が上がらない。そして、立ち往生、泥沼地獄?の始まりでした。やがて“採ったぞ!”と大きな声が広いビオトープに響く。前岳、中岳、後岳と見事な蓮連峰でした。次々とレンコンは土手に運ばれました。東屋横の草に敷かれたブルーシートの上に宇部市指定のポリ袋が17個並んでいました。袋の中は収穫の蓮がいっぱい。水路の冷たい水できれいに化粧直しされていました。たき火は燃え尽きていた。09年ビオトープのラストイベントは無事終了しました。日本酒、甘酒、コーヒ等はすべて暖かった。

明日の夕食を連想します。女房の独り言“この人は性懲りもなく来年も蓮堀に行く、何本とれることやら?”

さて一句 足抜けば 落ち込む水や 蓮根堀り (ハスネ)

「会員遍歴の想い」

(原田満州夫 記)

会報の100回記念冊子を編集した。100回と言えば毎月発行しても8年以上となる。よく続いたものである。ひとえに西原編集長がこれでもか、これでもかと毎月会報の原案を各編集委員に送ったからこそと思う。

会報初期のころ吉富壮介会員のビオトープの周辺の逸話、地域伝説の紹介が会報の一役を担っていた。また吉富会員はビオトープ建設時に、チェーンソーを片手に杭作りの名手として精を出しておられたのが思い出される。

近い記憶では会報の一部を連続して記載いただいた美濃和信考会員にはビオトープというものも含め、維持活動、勉強会に新鮮な一役を担っていただきました。特にエコアップ活動、外来種の駆除には、並々ならぬ努力をいただきましたが、残念なことに転勤というもとに直接活動に参加できなくなりました。

また建設時には杭打ち名人として山大農学部教授の西山壮一会員も記憶に残っている。ただ竣工後の活動参加が見られなくなったことを非常に残念に思っています。

設立当初頑張っておられた会員のうちで、活動が自分の考え方と違うということで、脱会された方も数名おられましたが、名前の記憶がなくとも顔や動作の記憶は残っている。さぞかし他の団体で立派に自分の意思を貫徹しながら活動されておられることと察します。

当初は元気で活動されていた方たちも年数が体調を崩され活動を控えなければならなくなった方々には「本当にごくろうさまでしたと」申し上げ活動参加されたことを感謝いたします。

古富制会員、大村美智子会員、納屋早与子会員、中村琢孜会員、潮村浩三郎会員各位殿

残念なことに会員でご逝去された方も、吉富壮介さん、中本昇さん(中本亜矢子会員のご主人)伊藤敏光さん、ほか下関から参加されていた中島謙さん、それぞれ活動をなされた会員の皆様にはご冥福を申し上げます。

5. ビオトープ関連（ビオトープのトンボたち）（管 哲郎 記）

（19）ホソミイトトンボ（イトトンボ科）*Aciagrion migratum*(Selys,1876)

本州から奄美諸島まで生息し北海道からは記録が無いようです。台湾、中国大陆にも生息する細身のイトトンボで夏型と越冬型があります。夏型は7月～9月、越冬型は8月～翌6月までとされていますが、私たちの感覚では一年中生息している感じです。

越冬型で羽化したトンボは枯れ木に似た色をしており、そのまま越冬します。早春に暖かい日が続くと池近くの林縁部に出て活動が始まります、そのときには一部の個体にはからだ半分の体色が青く変色しているものもみられ、やがて4月に入りため池に出たトンボは美しいブルーな体色になり鮮やかに変化します。夏型のトンボは青色と緑色の2タイプがいます。♂の腹は細く、♀の腹は少し先にゆくほど太いのである程度見分けられます。



4月 変色したホソミイトトンボ♂の越冬型



5月 ホソミイトトンボ♀越冬型



ホソミイトトンボ♂夏型 8月撮影



ホソミイトトンボ♀夏型 8月撮影

*夏型のトンボは眼や体の色がすこし緑色をしている。



9月28日撮影、越冬型♂



4月 越冬型ホソミイトトンボ連結産卵

* 越冬型は羽化後枯れ葉色のまま成長し冬を越します。越冬場所は風雨をさけられる木の洞や岩の隙間などとされていますが、筆者はまだ確認できていません。

6. 会よりの連絡事項 （事務局より）

今年もあっという間が過ぎ去りました。ビオトープ借地期限が近付き何回となく厚東川水系…協議会や我々「つくる会」でも話し合いを持ち、NPO法人化が一番の解決方策であることは今後の活動に問題なく継続可能であることは誰もが解って来た。ただ、NPO法人化後のリスクも発生することも分かってきた。単純ではない。いずれかのNPO法人の傘下に入りそのリスクを減じることで活動を続けていきたいとの考えが最終案となっている。山口県環境政策部及び厚東川水系…協議会も、この「つくる会」提案で宇部市、宇部環境コミュニティ倶楽部に働きかけていることが年末までの現状である。

「里山ビオトープ」の借地権については、一年間の延長で「厚東川水系・・・協議会」が又動いていると聞いた。そうなれば残り1年と三カ月は、後を濁さないよう「つくる会」は確（しっか）り活動を続けなければいけない。又、既存のNPO法人の傘下に入ってもリスクを減じた部分はそれを返さなければならないことになる。それはビオトープの活動を今以上に行うことで返していくことになる。

7. 編集後記

今年も残り僅かとなりました、1年を振り返るとビオトープ活動にほとんど参加出来ず、また多くの問題にも良い知恵は生まれず、お役にたてず申し訳ございません。来年こそは・・・と思うだけで、来期も天候は回復出来そうにありませんが、なるべく参加したいと思っています。

（ 若林 正治 記 ）